教えてホームドクター

子宮内膜症

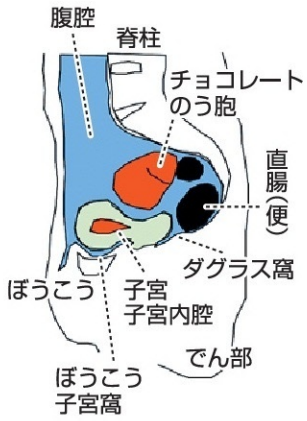
不妊症、卵巣がん招く

女性ホルモンの分泌抑え治療

産婦人科医
今井篤志氏

最近よく耳にする女性の疾患の一つに、子宮内膜症があります。月経がある女性の10％が子宮内膜症に悩んでいるといわれていますが、50年前に比べ3倍になりました。子宮内膜症は月経痛や腹痛という症状を来すのみならず、放置すると不妊症や卵巣がんの原因となります。今回は子宮内膜症について考えましょう。

子宮内膜は子宮の内腔を覆っています。女性ホルモンの影響で厚くなり、毎月剥離・出血します（月経）。この子宮内膜や子宮内膜にとてもよく似た細胞が、子宮内腔以外の場所、例えば卵巣、腸管表面、ぼうこう、肺などで発育してしまうのが子宮内膜症です。子宮以外の場所の子宮内膜もホルモンの影響を受けますので、月経時には剥離・出血します。



しかし、血液や内膜組織を体外に出すことができずに、体内にたまります。月経に一致した激しい痛みはこのためです。血液は液体ですから当然ながら腹部の空間の最下部にたまります。子宮と直腸の間（ダグラス窩（か））、ぼうこうと子宮の間（ぼうこう子宮窩）や卵巣周囲です。たまった血液は血腫となり、周囲には炎症や癒着が起きます。症状としては、月経痛や月経時以外の下腹痛があります。ダグラス窩に病変が発生すると、腰痛や性交痛の原因となります。不妊症の原因ともなり、原因不明の不妊症患者の半数以上に子宮内膜症が存在します。子宮内膜症が卵巣に発生すると、卵巣チョコレートのう胞といわれる腫瘤（りゅう）をつくります＝図＝。内容は月経に伴って剥離・出血した血液です。

肺内部に発生すると、月経時にせきとともに血液を吐いたりします。ぼうこうや尿管にできると、尿に血液が混じります。

子宮内膜症の原因はいまだ明らかになっていませんが、精子や受精卵の通り道である卵管を、月経時に剥がれ落ちた子宮内膜の一部が逆流し、卵巣や腹腔内に達して根を張るという説が最も広く受け入れられています。ですから、子宮内膜症は初経後から10代後半にかけて発生します。しかし、卵管を通した月経血の逆流は誰でも見られるのですが、子宮内膜症になる人とならない人の境界は不明です。

子宮内膜症、特に卵巣チョコレートのう胞を有する女性では、卵巣がんの発生する危険性が高いことが知られており、その頻度は約1％です。チョコレートのう胞内の血液が長い間に分解され、ヘモグロビンから遊離した鉄イオンが、がん化に関係していると考えられています。したがって、チョコレートのう胞を抱える場合は、卵巣がんの合併の可能性を念頭に置くことが重要です。

子宮内膜症は女性ホルモンの影響を受けますので、今のところ閉経するまで完治しません。卵巣からの女性ホルモンの分泌を抑えるのが治療の基本ですが、年齢や妊娠を希望するかしないかで治療薬を選択します。子宮内膜症の治療は進歩が著しく、月経痛のつらさを我慢する必要はありません。専門家の知恵を借りましょう。（松波総合病院腫瘍内分泌センター長・羽島郡笠松町田代）

無断複製・転載を禁じます